

<会員のひろば>

## 大きな知（霊）の時代の予兆

佐藤 修（千葉県/株コンセプトワークショップ代表）

4年前に、25年間所属していた会社を辞めました。人生80年とすれば、一生には三つの四半世紀があります。最初は学生、次は組織人として過ごしてきましたが、次の四半世紀（全うできるかどうか定かではありませんが）は組織を離れて直接社会に入ってみようと考えたのが、会社を辞めた理由でした。辞めてからの計画は皆無でした。

退社して翌日から、まずそれまでやったことのない地域住民運動に関わってみました。会社とは異質な世界でした。たくさんのお話を学びましたが、社会人だったそれまでの自分が果して社会人だったのだろうかという疑問が出てきました。盛んに言われている女性の社会進出も、実は女性が会社に取り込まれることであり、社会進出どころか社会離脱ではないかとも思いました。

いろいろな人にもっと会ってみようと考えて、都心に小さなスペースを開き、友人たちに声をかけてみました。1週間に100人を超える人達が遊びに来てくれました。実に様々な人達がやってきました。東京の良さを改めて知りました。あまりの面白さに、住民運動をさぼって人に会う生活に埋没してしまいました。今も続いています。

面白いのは東京だけではないはずだと思い、そのうちに日本各地に出かけるようになりました。東京とは全く別の人生があるのを発見しました。日本の広さも実感しました。東京で語られる豊かさやゆとり、あるいは文化や仕事、いかに一面的なものにすぎないかも知られました。

そんな生活をしているうちに、企業が以前とは違って見えてきました。企業の持つ大きな意味も改めて実感させられました。最近、組織を離れた立場で、もう一度、企業のことを考え始めています。企業と社会の関係、会社と社員の関係、仕事と人生の関係に関心を持っています。

それはいくつかの具体的なテーマにつながって

いきます。ひとつは保育問題です。子供を預ける保育所ではなく、子供たちを通してコミュニティが育つ保育システムを構想しています。ソーシャル・フォスターリズムという勝手な新語をつくらせて、企業の人達と一緒に小さな研究会を始めました。男たちの生き方を見直すと言えるかもしれません。企業を背負う男たちが、幼い子供たちとの接点を持つだけで、社会も企業も変わるように思います。いや、変わらなければなりません。

各地のまちづくりにも関わっていますが、それも根っこは同じです。当然のことですが、ハード依存ではない、コミュニティの回復がまちづくりの基本だと考えています。様々なところに仲間ができて、いくつかのグループが動きだしています。

ともかくこの4年間、実に様々な人達と出会いました。みんな魅力ある人達でした。そして、それぞれのテーマを持っていました。その人達ももっと自分の土俵から飛び出して、異質の人と協同しはじめたら、社会は様相を変えるはずですよ。その現場に立ち会えばうれしい限りです。

企業のあり方や経営のあり方も当然、関心あるテーマです。いま経営論ばかりですが、本当に必要なのは企業論だろうと思います。ある雑誌に企業についての試論を連載しているうちに、行き着いたひとつが協同組合でした。

そんな状況にある時に、協同総研に出会いました。もう入るしかないわけです。

いずれにしろ、ともかく面白い時代です。様々な知が結びつき始めているような、そんな「大きな知の時代」を予感しています。それも西欧の合理的統合ではなく、もっと大きな根源的なものの存在を感じています。「知」ではない、「もうひとつのち（霊）」かもしれません。

そんな時代を思い切り楽しみたいというのが、無責任ですが、いまの私の正直な気分です。